

2020年美術検定・1級問題 解答および講評

※1級は選択問題・記述問題の合計83点以上で合格です

<選択問題> (各5点、合計25点)

【解答】

Q1・アーツ千代田 3331

Q2・十和田市現代美術館／金沢 21 世紀美術館

Q3・計画の時点で施設の開設が自己目的化されており、開館後の中長期的な活動方針が曖昧。

Q4・持続的な地域振興や災害復興支援

Q5・アートの自律性が劣後し、他の目的のために回収されてゆく

<記述問題> (75点)

■ 出題・採点のポイント

現在の社会状況と美術館が置かれた状況を踏まえて今後の公立館の方向性を考えるという、実践的かつ正解のない設問である。美術館の社会的役割や活動内容についての知見と、市民として考える今後の美術館像および美術の価値を結びつける、しなやかな思考力を試している。美術館ボランティアの経験がなくとも、記述条件を満たすよう適切な事例を選び、それらの分析と自分の考えを結ぶことにより結論を示すことができる。採点にあたり、以下のポイントを評価基準として設定した。

- 1 論理的構成力：説明は、序論・本論・結論で構成されており、論旨に一貫性があるか
- 2 事例・資料に基づいた具体性：実際の美術館活動事例や資料を踏まえた上で、美術館の状況や課題を適切に解釈し、適切な具体例を用いて意見を展開しているか
- 3 創造性やオリジナリティ：今後の美術館の方向性について、自分なりの視点に基づいて具体的な例を挙げて説明をしているか
- 4 コミュニケーション力：一般市民も参加する会であることを踏まえ、美術館・美術関係者あるいは特定の業界関係者以外に偏らないわかりやすい文章になっているか

※その他、記述条件を満たしているかも評価に反映させている

■全体講評

この設問では、コロナ禍における美術館のリアルな課題とその解決策として実現された活動例の検討、およびそれらを踏まえた今後の美術館のあり方が問われている。評議委員会でコロナ禍における館の今後の方針について適切に述べているものに、高評価を与えた。

なお、一貫した論旨で記述を展開すべきところを、序論や本論の大部分を事例の羅列に費やした解答が散見された。また、多くの事例や主張を盛り込もうとするあまり、箇条書きのような読みにくい答案も目立った。

以下、問題の趣旨を理解して、序論・本論・結論を適切な分量で配分し、論理を展開できた例を示す。

★参考：1000文字程度の記述や小論文において、一般的な序論・本論・結論の配分は、1：3：1や1：7：2くらいが望ましいとされている。

【解答例1】

コロナ禍は全国の美術館に「来館者の安全と収益確保の両立」という課題をつきつけた。来館者の増加は収益の増加につながる一方で、ウイルスへの感染リスクを増大させる。このジレンマを打破すべく多くの美術館が取り組んでいるのがオンライン上での活動である。例えば東京国立博物館は、コロナ禍による臨時休館により開催できなくなった特集展示の様子をオンライン上で公開した。また、ドワンゴ社は、休館中の展覧会をネット配信する「ニコニコ美術館」を提供し、オンライン上で活動する資源を有しない美術館を支援する取組みを行った。これらの取組みは美術館にとって収益確保に直結するものではないが、収益化につなげた事例もある。例えば、ワタリウム美術館は、同館が選んだ動画を有料レンタルできる映像アーカイブ事業を開始した。

このようにオンライン活動の内容は多岐に亘るが、そのメリットは何か。まず、物理的な制約がないことが挙げられる。美術館は所蔵作品をオンライン上に公開し、世界中の人々にその存在を知ってもらうことができる。例えば国立西洋美術館は、ホームページ上に所蔵作品のデータベースを設置している。ロンドンナショナルギャラリーのように、学芸員による所蔵作品の解説動画をオンライン上に公開する例もある。次に、美術館の収益多角化を可能とする点が挙げられる。例えば所蔵作品の有料コンテンツを開発し、芸術に関心がなかった人々にアプローチすることで、有料コンテンツの売上のみならず将来美術館を訪れてくれる潜在的なファンを増やすことができる。他方で、オンライン活動のデメリットは何か。一言でいえば作品を生で鑑賞できないことである。作者が表現したかった色、素材感、作品全体から醸し出される空気感等は美術館でしか味わうことができない。「オンライン領域の拡充が進むなかでは、現実空間での実体験がこれまで以上に貴重になる」※1との指摘もある。

多くの美術館がオンライン活動に活路を見出す中で、今後の当館の活動はどうあるべきか。私は、活動が制限される今だからこそ、改めて美術館としての存在意義を見つめなおし、当館ならではの個性を追求すべきだと考える。理由は、今後各美術館がオンライン活動を積極化することで活動内容が似てくることが予想されるからである。結果的に他の美術館との差別化を図るうえで重要なのは、当館独自のビジョンだと考える。例えば、十和田市美術館は、街とのつながりを常に意識し、作品を館内のみならず街中の店舗などを使って展示する取組みを継続している。館長曰く「美術館は「基地」みたいなもので、「舞台」は街のような感じ」※2だそう。当館としても、定期的に評議委員全員で当館のビジョンを見つめ直す機会を設けてはどうか。当館のシーズとニーズを洗い出し、ビジョンを皆で語り合う中で、オンライン活動を含めた活動内容の方向性が見えてくると考える。(1191字)

※1『ウェブ版美術手帖』2020年5月5日付 <https://bijutsutecho.com/magazine/series/s25/21849>

※2『ウェブ版美術手帖』2020年2月29日付 <https://bijutsutecho.com/magazine/interview/21381>

【解答例1／講評】

序論では、現状での一般的事例をいくつか整理した上で課題を明確に析出している。本論では事例を基にオンライン活動のメリットとデメリットを検討し、明確に書き分けられている。メリットは、メディアによる美術館の支援、潜在的なファンの拡充である。デメリットは、鑑賞における身体的全体性の欠如、収益性の不安定さである。本論で行った検討を通じ、結論では、それぞれの美術館独自のヴィジョン・存在意義に立ち返ることが必要と論じた。今後、オンライン上での活動が重視されることは想定しやすいことである。しかし、オンライン導入は館ごとに異なる目的や実態に応じるべきであり、同時に館のある地域も視野に入れた展開が必要であることを、十和田市現代美術館の活動を例に提示した。

序論・本論・結論は一貫してつながっており、問に対する明快な解答として提示できている。かつ、地域との連携や美術館活動の根本的な問題にも言及した、広範な視点を持つ稀有な答案であった。

【解答例2】

2020年は新型コロナウイルス感染拡大の下、一時休館を余儀なくされていた多くの美術館が、様々な取り組みを模索している。個人的には新装開館したアーティゾン美術館来館のためネットで事前予約。後日、人数制限の中、美術館サイドも試行錯誤しつつ、ご対応頂いた記憶が新しい。今回は美術館毎の具体的施策3例を通じ、そのメリット・デメリットを検証しつつ、美術館の将来像を展望したい。

1例目は東京藝術大学大学美術館の特別展「あるがままのアーティスト一人知れず表現し続ける者たち」である。主催者の藝大美術館と協力企業はコロナ感染対策としてテレプレゼンスロボットを通じ交流を促すアプリを開発。スティック型電気掃除機を連想させる形状の自走式ロボット1台に最大5人同時ログインでき、ビデオ通話しつつ、本体カメラを通じて作品を「ソーシャル鑑賞」できる機能を備えている。メリットとしては、他の来館者を気にせず、自分たちのペースで鑑賞でき、想像より満足できたとの意見も寄せられた。一方で、実空間とオンライン情報の発信タイミングにズレが生じた事象も指摘されており、問題点も明らかになった。

2例目は横浜美術館で開催されたヨコハマトリエナーレ2020「AFTER GLOWー光の破片をつかまえる」である。小型人型ロボット「OriHime」が採用された。動作する首と腕、カメラやマイク、スピーカーなどが搭載されており、インターネットを通じスマホやタブレットで遠隔操作できる。操作者でもある鑑賞者は、「OriHime」で撮影された作品をバーチャル体験ができる。また、ロボット自身の動作を通じて鑑賞者の意思表示も可能。しかし、「OriHime」経由の「ソーシャル鑑賞」は館内で一緒に鑑賞してくれるサポーターが必要。コロナ禍の中、サポーターの安全性の確保、鑑賞者との信頼関係構築等々課題は残る。

最後に多くの美術館が既に取り組んでいるYouTubeに代表されるオンライン・コンテンツ配信であるが、今回は国立西洋美術館を3例目として取り上げたい。数年前からコンテンツ配信していたが、今回の事態をうけて更新頻度は増加。企画展を取り上げた内容やギャラリートークを軸とした内容等企画アイデアも広がりを見せている。

前述した3例に通底しているのは「オンラインリアル」を極めると、逆に「リアルな価値」の凄みを際立たせてしまう矛盾を抱えていることだ。しかし、舞台芸術「演劇」が撮影機材の進化により、総合芸術「映画」を生み出した様に、映像技術の進歩が、より魅力的なオンライン鑑賞を具現化する未来も否定できない。米ア

マゾン事業が通販から配信に拡大した様に、美術館のオンライン鑑賞が物販事業の拡大を誘発する展開も見込める。昨今、映像コンテンツが「聖地巡礼」という新たなツーリズムを生み出した様に、オンライン鑑賞が新しい来館者を創出する触媒になる可能性に期待したい。(1193 字)

【解答例 2 / 講評】

多くの事例を詰め込まず、過不足ない文章で理路整然と論を展開した点が評価された。序論で提示した課題について 3 例を取り上げ、それぞれのメリットとデメリットの両面から検討。1 例目は鑑賞の満足度の向上、発信上のトラブル、2 例目は今まで来館できなかった層の開拓、鑑賞サポーターとの信頼関係構築の必要性、3 例目はコロナ禍によるオンライン・コンテンツの急速な更新頻度の増加と新規コンテンツ企画の発展である。多くの解答がメリットとデメリットの紹介に終始しているのに対し、筆者の具体的で明確な分析が行われている。さらに結論として、オンライン上での活動の今後の進展の可能性を、「演劇」「映画」など時間芸術の変遷事例を参照しながら展開している。

序論・本論・結論の配分も、184 字・743 字・269 字と適切で、1 つの論としてみごとに構築できている。新しい文化形態や収益事業、来館者創出の可能性を指摘するなど、未来志向の美術館活動への取り組みに活路を見出そうとするユニークな答案である。